

契丹文字と西夏文字

吉池孝一

1. 契丹文字西夏文字概観

長田夏樹 2001(発表 1993)にある「西夏文字もまた、女真文字同様契丹文字をもとに製作されたのではないか」との想定は興味深い。そこで先ず契丹文字と西夏文字の概略を述べ、次いで両者の関係について考えてみた。

さて擬似漢字とされる契丹文字・西夏文字・女真文字のうち、契丹文字には920年に公布された契丹大字と924-925年頃になる契丹小字がある。先ずは契丹大字であるが、『新五代史』巻72に「漢人教之以隸書之半増損之、作文字數千」(「漢人は隸書(漢字の俗字)¹の過半を増減し、文字を数千作り伝授し」とあるように、漢字の筆画を増減して作った文字や漢字の構成要素を組み合わせて作った文字がある。さらに漢字をそのまま利用した「皇帝太皇一二月日東南」などもあり多数にのぼる。これらは漢字との字形上の継承関係が明らかなものである。そのほかに漢字との字形上の継承関係は明示しえないが漢字に類似した方形の文字がある。次いで作られた契丹小字は、単音もしくは音節を表わす単位(原字と称す)を組み合わせて長方形の単語(多音節語を含む)にまとめる。その原字は一部を除き漢字との字形上の継承関係を明示するのは困難である。もともと原字の筆画は漢字に類似しており、原字を左右上下に配列する法は漢字の影響を被ったとみなすことができる²。

契丹文字の後の西夏文字は、西夏の初代皇帝李元昊が大臣の野利仁榮らに作らせ西夏(1038-1227年)建国直前の1036年に公布したとされる。『宋史』巻485「夏国上」には「元昊自制蕃書、命野利仁榮演繹之、成十二卷、字形體方整類八分、而書頗重複。」(「元昊は自ら蕃書(西夏文字)を作り野利仁榮に命じてこれを演繹し十二卷を成した。字形は方整で漢字の八分(隸書)のようであり、その書は頗る重複したものであった。)」とある。西夏文字は、形声字と会意字を主体とする表意文字で6,000字余りあり、これによりチベット系の西夏語を表記する。漢字や契丹文字と同様に、字形を方形にまとめ縦に右から左に向かって書く。当時の字典『文海』は西夏文字の構造を冠・偏・旁・脚などの要素に分けて説明しており漢字の構造を彷彿とさせ、このような文字の構成要素を組み合わせて文字を作る方法は漢字の構成原理を模したものとされる。文字の構成要素の筆画は漢字に類似するが漢字との字形上の継承関係を明示するのは困難である。

¹ ここで言う「隸書」は聶鴻音 1999によると伝統的な隸書ではなく当時通行していた漢字の俗字体を指すという。

² 契丹小字の原字の配列法と漢字との関係については吉池 2013 参照。

2. 第3の契丹文字と西夏文字

以上契丹文字と西夏文字を概観したが、この両者の関係に言及したものに長田2001(発表1993)がある。長田2001は契丹文字に3種あるとする。この説の淵源は山下泰蔵著「大遼大横帳蘭陵郡夫人建静安寺碑」(『満蒙』1935年)にある。山下氏は、「静安寺碑」の文字が『書史会要』所載の文字とも慶陵哀冊の文字とも異なることより、『書史会要』所載文字(=『燕北録』所載文字)を契丹大字とし、慶陵哀冊碑文の文字を契丹小字とし、静安寺碑の文字を先行の契丹文字を簡易にした第3の契丹文字とした。この契丹文字3種説を、長田2001は形を変えて受け継ぎ、静安寺碑などを契丹大字とし、慶陵哀冊などを契丹小字とし、『書史会要』(=『燕北録』)や「成吉思皇帝聖旨牌」の文字については契丹大字を簡略化した第3の契丹文字とした。長田氏は、第3の契丹文字と西夏文字の字形を比較した。両者に類似点のあることを指摘し、この第3の契丹文字を参照して西夏文字が作られたとしたのである。たしかに『書史会要』(=『燕北録』)や「成吉思皇帝聖旨牌」の文字は契丹大字とも契丹小字とも異なり、見方によっては西夏文字に類似した部分があるけれども、この種の文字資料は少なく、有効な判断を下すことができる状況にはない³。

3. 契丹小字と西夏文字

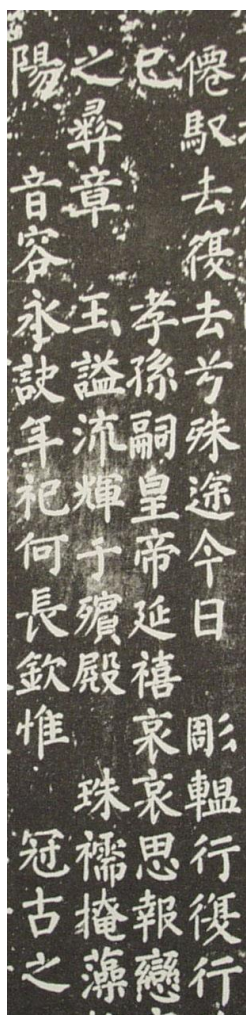
もっとも西夏文字を作製する際に先行の契丹文字を参照するということはあり得る。漢字、契丹大字、契丹小字、西夏文字を並べて見比べると、西夏文字には契丹小字に類似した部分がある。文字の筆画が似ているのは四者に共通しており、擬似漢字と称される所以の一つなのであるが、そうではなくて、筆画の画数の多い姿(Gestalt)が似ているとの印象を受けるのである(下図参照)。西夏文字について『宋史』に「字形體方整類八分、而書頗重複。」(「字形は方整で漢字の八分(隸書)のようであり、その書は頗る重複したものであった。」)とある。「書頗重複」の意味の理解は容易ではないが、似通った文字成分が多用され1文字の筆画数も多いということであろうか。そうであるならばこれは西夏文字の特徴ともなっている。いうまでもなく漢字も筆画数の多い文字であるが「一 二 三」など10画以下の文字も多用される。それに比べて西夏文字は平均して筆画数が多く、西夏文と漢文と並べると西夏文の筆画数の多さは際立つ。このような筆画数の多さはウイグル文字などとは対極をなすものであり、西夏人はこの筆画数の多さによって文字に威厳を付与することができると考えたに相違ない。漢字よりも更に筆画数の多い文字を目指した結果が西夏文字であり、その契機は契丹小字にあったとみたい。

契丹小字は単音もしくは音節を表わす単位(原字と称す)を最小で1つ最大で7つ組み合わせさせて長方形の単語(多音節語を含む)にまとめる。西夏文字は漢字のように1音節を1単位にまとめる。両者は文字としてまとめる単位が異なるため単純な比較はできないが、原字をつづり合わせた契丹小字の1単位の筆画数は漢字に比べて多いとの印象を

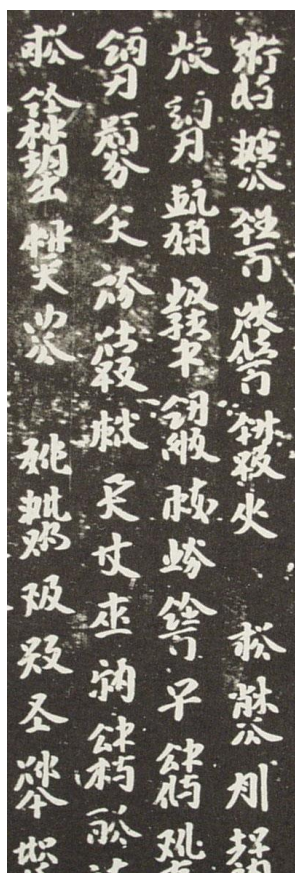
³ 以上吉池2011参照。

与える。このような契丹小字の出現は、漢字に類似した筆画を使用しなお且つ画数の多い文字が漢字以外にもあり得るということを示すこととなった。古来より漢字は東アジアにおいて周辺民族に対して大きな影響を及ぼし続けた文字であったわけであるが、漢字以外にも漢字に負けない威厳と重厚さを備えた筆画数の多い文字が存在し得るということを示した意義は小さくない。西夏文字の作成者は文字作成に際して大いに刺激を受けたはずである。筆画数の多い契丹小字の姿(Gestalt)を模倣しそれを漢字風に方形にまとめたものが西夏文字であると想定してそれほどの無理はないと考える。

最後に誤解がないように再度述べるならば、いまの段階で契丹文字と西夏文字との間において、文字の構成要素もしくは文字そのものに継承関係を明示し得るというつもりはない。また、西夏文字の構成要素は契丹小字のような表音要素ではなく、漢字の冠・偏・旁・脚などに相当する意味を担った要素に置き換えられているわけであるが、この点については漢字に倣った結果としてよいのであろう。



宣懿皇后哀冊碑文漢文



宣懿皇后哀冊碑文契丹小字



妙法蓮華經序西夏文字

参考文献(発行年順)

- 山下泰蔵 1935.「大遼大横帳蘭陵郡夫人建静安寺碑」,『満蒙』16年10期,62-67頁.
- 聶鴻音 1999.「契丹大字解読淺議」,『民族語文』1999年第4期,51-57頁.
- 長田夏樹 2001.「契丹文字,女真文字及び西夏文字の関連性についての一考察 —成吉思皇帝聖旨牌裏面の番字を足掛かりとして—」,『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』京都市:ナカニシヤ出版,738-745頁.もと1993年口頭発表.
- 吉池孝一 2011.書評「契丹文字,女真文字及び西夏文字の関連性についての一考察」,『長田夏樹先生追悼集』東京:好文出版,207-208頁.
- 吉池孝一 2013.「字素排列法 —关于汉字、西藏文字、契丹小字和训民正音—」,『KOTONOHA』第130号,1-8頁.